



中高生とともに差別と闘う

『ペットボトル・マジック』

吉成タダシ



若者へのメッセージ

小説などというものとは無縁のなかで生きてきた私にとって、言葉を探り、ストーリーを紡いでいくことは、本当に未知への挑戦でした。

しかし思いは勝手に変わらず、ぶれることはありませんでした。中高生、特に読書が苦手な本にふれることの少ない若者に、柔らかいタッチで人権の大切さを伝えたい。

人間が本質的に大切に思うものは、誰にとっても大切なもの。自分にとっても大切なものは、他の誰にとっても大切なもの。

そんなメッセージが伝わるように、言葉や情景や思いをできるだけ丁寧に、一つ一つ描いていきました。それはまるで、大きな大きなピラミッドの石を一つ一つ積みあげていくような感覚であり、今まで味わったことのない途方もない作業でした。それだけ聞けば面倒くさいことのように聞こえるかもしれませんが、不思議とそういう感覚だけではなく、実に楽しい時間であったようにも思えます。例えて言えば、自分の背中が翼が生えたような感覚になりながらストーリーを紡いでいく、そんな作業でした。

『ペットボトル・マジック』

高校三年生のコウと結夏は、夏休み、偶然出会います。出会った朝に見せた結夏の驚いた表情が忘れられず、コウは同じ場所で会えるように同じ時刻に登校をはじめます。声をかけ合い急速に距離を

縮めていく二人。結夏から、十日間だけこの地に来ていることを告げられ焦るコウ。せめてもの思い出づくりにと、コウは毎日会う画策をはじめます。

物語には、鍵を握るフレーズをいくつか散りばめました。

* * *

「じゃあ、どうして言わないの？」

「言えはいじやん！」

「オレは見えない何かをいらつように放り投げる口調で言った。」

「言えないから言わないのよ！」

乾いた空気が、ピシッと音を立てて裂けた。

「……………」

息を呑んだ。結夏の目を見つめた。心の中で。実際は、見ることができなかった。

「…………ごめん。…………言うとな、差別されるから…………差別されるのが怖いから、言えないんだよ」

「…………うん」

結夏の真意も、差別の意味も分からないまま、それでも彼女を否定したくなくて答えた自分の言葉を、恨んだ。

「差別されないって分かってたら、みんな…………思ってる本当のこと、言うよ…………」

* * *

結夏がコウに言いづらそうにしながらも訴える場面です。

様々な人権問題に取り組んでいくなかで、私自身、幾度となくカミングアウトの場面に会ってきました。

「先生、オレもそうなんすよ」

かつて私が働いていたバイト先の後輩だった大学生のヒロ。ある夜、電話をかけてきて、母校の高校を訪問したときのことに話して話し始めます。お世話になった先生と話しているうちに、その先生の本棚に、部落問題の実践についてまとめた私の書籍を見つけたというのです。それまでさんざん一緒に遊ぶことはあっても、部落問題や人権問題について話をするのは一切ありませんでした。あくまでもバイト仲間だったから。ですから、教育に関係のないヒロに、書籍の中身について話すことはためらわれたのですが、部落問題にかかわる中学生のことを少しずつ話すうちに、彼は言ったのです。

「先生、オレもそうなんすよ」

「えっ！」驚いたと同時に、なぜわざわざ電話をしてきたのかが、スーッと結びつきました。そして、妙な嬉しさが込みあげてきました。妙な、というのは、教育関係でもない後輩のヒロと、この問題について思いつき話ができるということへの喜びでした。「今からうちに来い」その夜は、それまでにしたことのない話を、明け方まで語り合いました。

彼はその後大学を卒業し、通信教育で教員免許状を取得し、今まさに人権教育を通して小学生の子どもたちに向き合っています。

友人宅に呼ばれて行くと、そこには見知らぬ女友達。お互いに人見知りしない気さくな性格からか、彼女は私の仕事カバンをのぞき込み、私が書いた「人権だより」をまとめた冊子を見つけているのです。しばらく興味ありげにパラパラと眺めていた数日後のことでした。夜中に突然電話をかけてきたと思えば、唐突に言うのです。

「在日って何？」

あまりの唐突さに驚くのですが、眠気も覚めた私は逆に聞きました。

「いきなりどうした？」

彼女は答えました。電話番号は友人から訊いたこと。私が人権問題に取り組んでいることを冊子から理解したこと。そして、今つきあっている彼が在日コリアンだということ。しかし、彼からは結婚はできないと告げられていること。訳が分からず、在日についてのいるんな本を読みあさったけど、それでも分からず、どうしても彼の頑なさが見えなくて、どうして？ どうして？ 「どうして？」 そう言って、電話の向こうでむせび泣くのでした。

「本当に言いたいことは、一番言いたいこと。けど、本当に言いたいことは、一番分かってほしいこと」

誰にも話せない、誰にも相談できない孤独感。なかにはどんな相談もできる友人のいる人も多くいるでしょう。でも、そうじゃない人も、また多くいるのだと思うのです。

(次回「フクシマの問題」)